

第三百四十五回 青葉会

平成二十六年十二月十八日(木) 午後六時〜九時 丸紅来客食堂(談話室)

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生(御自宅療養中)

〈出席者〉 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 久米五郎太 小西弘子 後藤保明 豊田ゆたか

中野一灯 福島正明

伊賀山そらお 小早健介 朱牟田惠洲 土谷堂哉 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也

山内天牛 渡邊盛雄

赤田堅 川口孤舟 楠田彦十 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章

村田くに子 山崎青史 山本三恵

《互選句》

八点 捨てきれぬ迷ひの浮かぶ柚子湯かな

六点 処方薬一つ増へたる寒さかな

(☆・孤…(へ↓え))

☆ ハレルヤの調べに浸り賀状書く

☆ 手始めは父の位牌や煤払ひ

☆ ビル裾の将門塚や夜業の灯

☆ 乗り継いで青春切符雪見酒

(☆↓雪見酒青春切符を乗り継いで)

☆ リハビリの早足歩行冬ぬくし

猟犬の鼻が風読むけもの道

踏み石も元は石臼冬の庭

(☆↓石臼を今は踏石冬の庭)

行き先を走り書きして十二月

☆ 六十年使ひし硯賀状書く

☆ 地吹雪の被災地鎮む津軽三味線

☆ 年忘れ上野の寄席に身をゆだね

☆ 冬の日を求め窓辺の留守居かな

山眠るいつしか汚染忘れ去り

冬晴れや胎児の心音聞く娘

文楽「紙子仕立両面鑑」

助六は身請けの金なく年の暮

候補者は子供の世代師走空

☆ 古日記受診予約の多きこと

凍空(いてぞら)を突き破らむか観世の笛

冬うらら猫も背中を伸ばしをり

冬月や駄目に惚れきる法善寺

☆ 底冷えや立食(たちくい)蕎麦を待つ間にも

借りて来し本庇ひゆく横時雨

(☆↓借本を横時雨から庇ひつつ) (下五の表現がいい)

☆ 靴底の軋む新雪遠浅間

☆ マイセンのピアス艶めく聖樹の灯

冠雪の富士見て江ノ電軒かすめ

(☆↓軒掠めゆく江ノ電や雪の富士)

鱒起こし氷見の漁師は笑い顔

(☆↓鱒起し。笑ひ顔)

無為徒食風邪こじらせしひと月半

(☆…中七↓風邪を拗らせ)

盛雄 (孤・彦・保・千・龍・敏・灯・允)

忠彦 (猛・保・ゆ・允・く・青)

盛雄 (万・紀・猛・忠・孤・敏)

堂哉 (万・敏・灯・隆・青)

一灯 (万・忠・弘・正・三)

紀久男 (忠・弘・龍・敏)

弘子 (万・忠・允・く)

一灯 (孤・弘・允・く)

正明 (彦・五・ゆ・灯)

昇 (猛・彦・弘・青)

天牛 (万・孤・龍・く)

紀久男 (万・堅・灯)

全 (敏・隆・く)

恭延 (万・忠・五)

忠彦 (紀・ゆ・正)

全 (紀・正・青)

五郎太 (紀・彦・三)

全 (恭・隆・正)

保明 (万・ゆ・青)

全 (孤・五・正)

全 (猛・千・隆)

弘子 (紀・五・三)

惠洲 (万・紀・恭)

全 (五・弘・灯)

一灯 (万・保・ゆ)

全 (万・允・青)

啓子 (龍・灯・三)

全 (堅・千・允)

天牛 (紀・保・三)

二点

赤蕪の漬かりて白き鉢の中  
☆寒波来る選ぶ党無き投票日  
☆忘年会続きは来年早々に  
☆齒科通ひ水のつめたき週初め  
散紅葉(ちりもみじ) 川面を染めて友禅に  
(☆↓川の面を友禅染めに散紅葉)

そらお (紀・千)  
忠彦 (万・堅)  
全 (万・猛)  
五郎太 (万・彦)  
保明 (堅・猛)

冬うららうつすら竜馬のシルエツト  
(☆:中七・下五の描く竜馬像と季語の冬麗が乖離している)  
吾もまた枯葉一枚風に舞う  
(☆↓風に舞ふ枯葉一枚吾もまた)

弘子 (孤・隆)  
ゆたか (堅・龍)

☆冬山の荷に読み止(き)しの文庫本  
十二月今年も嘘を二つ三つ  
顔見世や玉三郎の目千両  
はやぶさよ行け冬空を切り裂いて  
ゴオゴオと冬將軍か天駆ける  
(☆↓がうがうと)

一灯 (万・彦)  
正明 (龍・隆)  
昇 (紀・五)  
啓子 (保・千)  
全 (恭・紀)

一点

☆聖樹の灯わが団地にも点りけり  
マスクして向いの座席睨(め)め回し  
紅葉散る我が家の借景浄土なり  
(☆:「なり」↓「めく」「かな」など余情をもたせたい)  
師走十日青色究め賞を得る  
(☆↓極月やノーベル賞得し青き色)

規雄 (万・恭)  
そらお (恭)  
紀久男 (保)  
猛 (忠)

北風に追はれて速し茜雲  
四国でも集落を孤立させる雪  
ひと安堵爆弾低気圧は来ず  
低気圧重き腰上ぐ冬麗  
健さんの優しさ肴に時雨の夜

全 (敏)  
全 (千)  
恭延 (正)  
全 (紀)  
五郎太 (恭)

☆聖護院大根蕩ける関東煮(かんとだき)  
初詣八勝七敗願ひけり  
手作りのお化け大根食べ飽きず  
ソプラノの響き途絶へて冬ざるる  
(☆・孤↓え) (コーラス仲間追悼)

弘子 (万)  
健介 (紀)  
全 (ゆ)  
堂哉 (隆)

蠟梅や鳥蜜に群れ吾は香に  
(☆・孤:中七↓蜜に鳥群れ)  
冬ざれの海駆け抜ける高速船  
(☆:中七↓海を駆け抜け)

ゆたか (堅)  
全 (く)

☆牡蠣好きの夫婦(めおと)今宵も鍋つつく  
☆出発はいつも零から冬木立  
冬薔薇七十歳の宝塚  
☆乾杯の好きな男や年忘れ  
ピルの灯も夜色樓臺春星忌  
(☆:蕪村忌ゆえ中七に詩情が欲しい)  
新カレンダー郵便受にねじ込まれ  
(☆↓郵便受いっぱい新カレンダー)

全 (三)  
正明 (万)  
全 (弘)  
規雄 (万)  
亜也 (紀)  
天牛 (紀)

●次回青葉会

一月二十二日(木) 初句会 午後5時半〜8時半  
▲当季雑詠五句 投句二句 午後5時半〜8時半  
二月二十六日(木)

(丸紅 談話室) ※開始時刻注意  
(丸紅 談話室) ※開始時刻注意

以上 文責 紀久男

平成二十六年十二月句会報

一 師走句会は、寄席見物してから忘年句会が恒例でしたが、今年は先生の事故（年末に無事退院され御自宅にて療養中）や病休者多い為取り止め、開始時刻を30分早めました。5時から飲み始め、先生の驚異的な恢復と総選挙を話題にして全員揃うのを待ったため、結局いつもの6時乾杯して開会。猛さんの披露で御覧のように盛雄さんが最高点でした。

弘子さんからのユツクムツクの洋菓子、正明さんから黒麹芋焼酎「魔界への誘い」（佐賀）、五郎太さんから「秀よし」大吟醸（秋田）、一灯さんから「八咫鳥（やたがらす）」大吟醸（吉野）、保明さんの「剣菱」（灘）、忠彦さんの「太平山・天巧」純米大吟醸（秋田）と美酒を堪能。

句会を早や目に切り上げて恒例の忘年会。天牛さんの投句FAXを回覧し乍ら恭延さん、ゆたかさん、正明さん、五郎太さん、猛さんがクリスマスソングや詩吟等美声を披露。久しぶりに盛り上がりしました。今回は今年活躍した人に進呈する俳句（万里子先生、孤舟さんに続いて昨年一灯さんの句掲載）、落語、歌舞伎の各カレンダーは用意しませんでした。

当日の話題：先生の的確な添削に感謝。先生、二月に米寿！。香川京子の講演「戦後の日本映画の光芒」、爆弾低気圧、「M・SPIRIT」に五郎太さん寄稿、日銀総裁との飲み会、原発等々。

二 関係者近詠

初雪の富士を車窓に見舞旅

眞希子

奈落へと落ちゆく恋の螢かな

孤舟

入院の母の家にひとり秋夜長

全

いつの間にか二人となりぬ盆の月

全

病床に母性健在金木犀

全

銀漢の尾に玲瀧と呱呱のこゑ

全

母の庭いぢりて秋蚊怒らせる

全

正論はいつも疎まれ菜を間引く

全

秋蝶の過る街頭インタビュ

全

鶴来る空に轍を残しつつ

全

小鳥来る名のある坂へなき坂へ

全

「爽樹」1月号

允章

とつぷり潮呑める引綱鯛引く

全

食細くなりし齢や寝酒酌む

全

海女小屋の細き掛金残る虫

全

牡丹鍋貴船は深き山の中

全

接岸の気仙語荒し天高し

全

富士淡く枯野の果に浮びけり

全

ふるさとや佇む肩に夕蜻蛉

全

黒き川一筋伸びる冬田かな

全

あの海にいま鎮魂の濃霧かな

全

ボロ市におん懐しの白火鉢

全

帰るさは無花果裂けてみたりけり

全

水洩や宝くじ買ふ列に居て

全

朝霧に櫛の大木浮び出づ

全

ジーンズで拭ひ林檎を食ふ若さ

全

「萬緑」 1月号

全

夫婦箸買へば即ち年用意

全

源流に乗鞍の雪木曾三川

全

「大鉄会」12月

全

つつがなく生きて傘寿へ冬の坂

全

年明けも業（ごう）居座れり梯子酒

龍平

今年また流れに乗れず年果つる

全

書初めのカチューシャ囓うキリル文字

全

突然の手術に耐えて返り花

全

あな速し孫のサービス初テニス

全

続々と喪中葉書の師走かな

全

肩上げの春着や跳ぬるちよんちよこりん

全

芝居はね浜町河岸に返り花

全

飲み屋から医者えと変る去年今年

全

「きたらぎ句会」12月

全

英語では単にセブンティ古稀の春

全

今年また妻の命日冬めける

全

幸せが皆にほほゑみ初日差

全

ひよ鳴くよ亡妻われを呼ぶ如く

全

初詣老ひ緩やかに唐突に

全

鱸酒や幽かにひびく波の音

全

「年賀状」

全

酔ひ覚めの襟立て急ぐ家路かな

全

雪吊の新しき縄匂ひけり

全

雪吊の新しき縄匂ひけり

全

三 岡潔「夜雨の声」角川ソフィア文庫 2014・9・25 ￥640

半世紀前「春宵十話」を読んで以来だが、俳句と連句について面白い解釈を披露しているのでお奨めです。この数学者の俳句の師は芥川龍之介。連句は中谷宇吉郎と巻いている。

解説を山折哲雄が執筆しているが、はまり役と思う。

平成二十七年一月十日

紀久男記